

国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第1回）議事概要

1. 日時：平成28年2月5日（金）13：30～15：20
2. 場所：秩父宮ラグビー場オープンルーム6
3. 議事（1）会議運営について
（2）これまでの経過と今後の進め方について
（3）最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方（案）について
（4）意見交換
4. 出席者 木島隆康アドバイザー、工藤晴也アドバイザー、杉山茂アドバイザー、藤岡洋保アドバイザー

5. 議事要旨

各アドバイザー紹介後、座長の互選を行い、木島隆康アドバイザーが座長に選任された。

<議題1：会議運営について>

- 事務局から、会議運営要領（資料3）について説明した。
- アドバイザーの了承を得て、本日の会議にて申し合わせた内容として決定した。

<議題2：これまでの経過と今後の進め方について>

- 事務局から、これまでの経過と今後の進め方（参考1～3、資料4）を説明した。
- 今後、資料の公表を行い、また、国民の方からもご意見をいただけるよう、ホームページに窓口を設置することを説明した。
- 資料4に示すスケジュールのとおり、最終保存場所を決定することの了承を得た。

<議題3：最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方（案）について>

- 事務局から、平成25年度にとりまとめた保存等検討委員会の議論（参考4）と作品の経歴等（参考5）を確認した後、「最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方（案）」（資料5）を説明した。
- アドバイザーから、技術提案内容のコンセプトを知りたいとの発言があり、事務局から、参考6、7により説明した。
- 事務局から、記念作品等の費用と設置のタイミングについて以下について補足説明を行った。
 - ・整備事業者が行う本体工事には、記念作品等の運搬や取付の費用は含まれていない。今後、予算が付いたとしても、2019年11月の完成後に行なう取付け工事であることを考えると、設置はオリ・パラ後になるものも出てくるかもしれない。また、設置できたとしても、オリ・パラ開催時は仮設物により見えないものも出てくるか

もしれない。いずれにしても、全てをオリ・パラに間に合わせるのには厳しいと思っている。

○アドバイザーから、以下の発言があった。

- ・1964年のオリンピック等の歴史が途切れることなく受け継がれることを確認でき、安心している。今後、安全性や周囲の環境に見合った設置場所を選定していく必要がある。
- ・人が手で触れたり、雨が掛かることで作品が劣化すること等を勘案し、配置について慎重に検討していきたい。
- ・技術提案書に示す配置は、旧国立競技場の配置の雰囲気に近いと感じた。経費のかからない範囲でバランスよく配置できるように検討が必要と思う。あまり似通ったものを集めない方が良いのではないか。
- ・壁画「勝利の場」については、状態が悪く再製作をしなくてはならないレベルであるため、現在、関係者が原画を探していると聞いている。他の作品についても散らばっていると思われる原画を集約・整理しておく必要もある。
- ・新たにつくられる建物は旧建物とは全く別物なので、壁画を旧建物にあったのと同じような所に置くことはできない。となれば、その壁画に新たな価値を発見して、それを重視して配置を考えるべき。壁画を新建物の周辺部にしか配置できないのは理解できるが、南側の4作品については、駐車場の壁で、バスの排気ガスの影響を受けることになるのではないか。劣化を促すことになるため、もう少し良い環境に置いたほうがよい。
- ・作品のサイズを勘案し、複数の記念作品を組み合わせることで、より良いストーリーや新たな価値を見出せるのではないか。「野見宿禰」と「ギリシャの女神」については、以前は高い位置にあり、競技者が仰ぎ見るものであったと記憶している。今の案ではアプローチの床に直に載るようになっているが、台座か基壇に載せて高さを少し上げれば、見栄えが良くなるのではないかと思う。
- ・「野見宿禰」と「ギリシャの女神」については、旧競技場では実はL字となっており、側面の部分を少しでも残すことでオリジナルを尊重すべきではないか。
- ・「野見宿禰」と「ギリシャの女神」については、旧競技場ではメインスタンドから競技者を見守ってきた。旧競技場と同様にスタンドに設置することは、難しいか。
- ・2020年以降は、各スペースの用途が変更される可能性もあるのではないか。
- ・新しいスタジアムの計画に影響を与えてはいけないと思っている。施設規模も大きくなり、見え方もこれまでとは変わってくる。1964年のレガシーを継承したいという隈先生のお考えは大変よいと思う。用途や人の流れも考慮した上で詰めていければと思う。
- ・「こういう理由でここに設置している」といった配置のストーリーが必要である。

○以下の質疑応答を行った。

- ・アドバイザーから、南側の4作品については、バスやメディアが行き交う場所であるため、他により良い場所があるのではないかと、との質問があり、事務局から、高さ8mが取れる場所は他にはなく、極めて限られた範囲である、と回答した。
- ・事務局から、ガラスなどで覆うという手法はないか、表面にコーティングを施すなどは可能であるかと、との質問をし、アドバイザーから、コーティングを施すと汚れ剥がれも出てくるためメンテナンスが難しくなる、ガラスについても継ぎ目が出てしまうと作品の見え方が違ってしまふ、との回答があった。
- ・アドバイザーから、「野見宿禰」と「ギリシャの女神」については、台座に乗せて仰ぎ見ることができないか、との質問があり、事務局から、技術提案内容の場所では作品と天井までの高さに余裕がなく、極めて厳しい、と回答した。
- ・アドバイザーから、「聖火台」については、オリンピック開会式の演出のメインであり、1964年の聖火台が2020年大会でも使われるのか、との質問があり、事務局から、開会式の演出によって決まるものであり、2020年大会の聖火台については知らされていない、昨今はフィールドの中央というのが潮流のようであるが、現時点では承知していない、と回答した。

○上記のやり取りを踏まえ、資料5「最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方(案)」について了承を得た。

○次回、ゾーニングや人の流れ、作品性を踏まえた配置のストーリーなどの検討資料を会議に提示することとした。